

次の時代への民衆風教育

UFOや異星人を迎へる準備まで

<http://www.jomaca.join-us.jp/kyouiku.pdf>

令和六年十月吉日

超近代開拓会 山田 学まなぶ ©

arigatou@image.ocn.ne.jp

※やまごことばの発声を、重んじたく、
旧かなづかひを、させていただきます。

〈現実認識化意図〉

日本社会において、明治維新以来の教育、とくに戦後の教育を、軌道修正すべし。アメリカ合衆国はもう、われわれの“お上”かみではない。

これが、次の異質な時代を生きる、かはい子や孫らのためなのだ。

日本民衆は、縄文時代からの伝統として、理屈には弱い、感性には強い。が、中途半端な理屈ではなく、本質論の単純さならば、今の学界とは別に、民衆の一部に、歴史的な強さが、育ちつつあります。わたくし自身、その民衆の一部に属します。

学問（とくに、本質論）の世界史の軸は、やはり、プラトン、アリストテレス ↓カント、ヘーゲルであらう。そして架空の認識を前提とした、これら学者、とくにヘーゲルの体系のすべてを、現実の認識に転換させはじめた（はじめたに、すぎない）のが、マルクス、エンゲルスである。マルクス、エンゲルスが生前になしえた少いことではなく、彼らが将来へ意図したこと、すなはち、ヘーゲル体系のすべてを、現実の認識に転換させること（以下、〈現実認識化意図〉と呼ぶ）、これを実は、レーニン以降の共産主義・社会主義・社会民主主義のほとんどが、継承してはゐらないのである。

〈現実認識化意図〉を、まともに継承しはじめたのが、意外にも、日本民衆のひとり、三浦つとむ（1911～1989）であった。三浦の最終学校歴は、家庭の貧しさもあり、（戦前の）東京府立工芸退学である。が、三浦は夢中に独学した。のち、マルクス、エンゲルスが生前になしえたことを、民衆にわかりやすく解説しつつ、〈現実認識化意図〉の新たな実行として、論理学 ↓ 認識学 ↓ 言語学ないし表現学 ↓ 民衆組織論を、開拓した。「マルクス主義 II 経済や物質」といふイメージとは別な、とくに人間の主体性にかかはるこれらの学問は、AI（人工知能）などにふりまはされつつある、これからの社会において、ますます重みをもつであらう。

その学問修業期に、三浦から直接の指導を受けた、滝村隆一（1944～2016）は、〈現実認識化意図〉の新たな実行として、国家論体系を樹立した。（のち、思想的には、三浦門下から離脱した。）

南郷継正（武道論）、薄井坦子（看護学）、庄司和晃（教育学）、吉本隆明（文芸批評）も、三浦から影響を受けてゐる。

わたくし・山田 学も、一九七二年（十六歳時）より、三浦つとむに学びつづけてゐる。〈現実認識化意図〉の新たな実行としては、近・現代の数学・物理学・生理解学の修正などを、開拓しつつある。また、マルクス、エンゲルスからの諸氏の〈現実認識化意図〉を、総合的に整理しつつある。ただし、あらゆる共産主義・社会主義・社会民主主義には、無理があると、判断してゐる。

いづれにせよ、虚偽情報も多い今の諸国家に対し、〈現実の世界についての学問〉を発達させることが、これからの地球公会としての悦びなのです。つまり、わが日本社会においてこそ、次の時代への民衆風教育が、準備されつつあります。

記録事業

コンピュータは最初、計算用に開発された。そのうち、事務・通信への使用が開発され、IT（情報技術）が、ICT（情報通信技術）となった。

が、最終は、記録を主眼とすべし。今増えてゐる、SNS用やAI用やブログチェーンの記録ではない。

学問の世界史と、一方、図書館などの世界史の、継承と発達としての、地球規模の記録事業である。

これは、AI、すなはち、表現ないし言語の、意味内容には触れず、大量の半導体により、表現ないし言語についての、統計的傾向を把握し、判定制御や生成をする、AIとは、正反対の、〈人間側の〉努力である。人間が、表現ないし言語の、意味内容を、ひろく深く、理解してゆく努力である。

学問の世界史を尊重する、とともに、民衆の生活や生産の現場感性により、学問を修正しつづける。この、人間としての最高の悦びにもとづく、努力である。AIなどのICTに依存し、ふりまはされつつある、今の傾向とは、正反対なのである。

地球公会の〈学問発達体〉といふ面として、わかりやすく記録集積でき、わかりやすく検索活用できる、記録事業である。民衆の賢人化に貢献する。

虚偽をまき散したり、おたがひをいぢめあつたりする、今のSNSなどの短所（衆愚的民主）とは、正反対への、希望なのである。古代ギリシャの学問史にたとへれば、ソフィスト（詭弁論者）から、ソクラテス・プラトン・アリストテレス（本質論者）への発達が、必要であり、必然である。

学問の本質の論

わたくしは、マルクス、エンゲルスからの諸氏の〈現実認識化意図〉を、総合的に整理しつつあります。

ラッセル (1872～1970) 以降の「現代哲学」の「知識はほとんど細分化していく……」といふ「常識」と、ヘーゲル (1770～1831) の体系の〈現実認識化意図〉の流れは、実に、正反対なのです。後者には、〈对立学としての論理学〉(いはゆる「弁証法」) がありますから、さまざまに、〈区別と連関〉を説明しつつ、〈学問本質論Ⅱ世界学本質論+科学本質論〉といふ総合こそが、可能なのです。そして意外にも、今の学界とは別に、日本民衆の一部にて、それが実行されつつあります。

わたくしどもが、今までに、思索してきた、〈区別と連関〉の諸項目Ⅱ本質論を、以下に、綴ります。

本質論は、むろん、抽象論であり、ここではまづ、具体論によるわかりやすさを、あへて略させていただきまして、抽象論の高みにのみ、接していただけませうか。(以降、一字下げの4ページ弱は、読解が容易ではありません。)

世界の本質、あるいは、世界の諸分野の本質には、以下の、〈区別と連関〉がある。(世界の本質の論が、世界学本質論。世界の諸分野の本質の論が、科学本質論。前者と後者を合せ、学問の本質の論。)

〈世界の本質〉

世界は〈主体と客体〉である。世界は〈体内と体外と認識したい〉である。体内が、主体であり、体外と認識じたいが、客体である。世界は、体内の動的存在と、体内の静的存在と、関係と、動的属性と、静的属性と、実体、である。体内の動的存在と、体内の静的存在が、主体であり、関係と、動的属性と、静的属性と、実体が、客体、すなはち体外と認識じたい、である。

世界はまた、生活と生産と自然と宇宙、である。

世界には、架空の世界と、現実の世界とが、ある。世界には、未知の部分と、既知の部分とが、ある。世界は、時間と空間の統一、である。時間の過去と未来、について、未知の部分と、既知の部分とが、ある。空間の壮大と微細、について、未知の部分と、既知の部分とが、ある。世界には、歴史があり、部分として、過程があり、部分として、運動がある。世界の歴史は、すなはち、進化と発達である。進化と発達には、流転と集結がある。異星人と人間社会の問題、もある。

世界は、あるいは、世界の諸分野は、本質と構造と現象の統一、である。世界には、類と部分と個が、ある。類には、普遍性があり、部分には、特殊性と普遍面があり、個には、個性と特殊面と普遍面がある。

世界は、さまざまに対立するものの関係にて、ある。変化は、瞬間（微細精度にて一定時間）にて、なにかであるとともにそれでない、といふ、対立の論理である。世界には、さまざまな面がある。それを順順に、確認すると、ある面であるとともに別の面である、といふ変化である。あるものと対立するものが、調和することもあり、闘争することもある。あるものの変化を、対立するものが媒介する、といふことがある。あるものが直接に、対立するものである、といふこともある。あるものから対立するものへ、対立するものからものであるものへ、否定の否定、といふ変化がある。

世界の部分に、質と量とかずと図形がある。量とかずと図形において、執着無限と、実用無限とがある。あるものと対立するものは、質と量において、浸透と転化がある。ものごとには、内容と形式がある。あるものから対立するものへ、内容と形式において、止揚しやうがある。

あるものと対立するものについて、対立の論理を解明するには、それらの〈區別と連関〉を、確認する。

対立するものが無い範囲にて、どういふ論理がありうるか、追究する、〈無対立学としての論理学〉が、論理学の主流であつた。国家を統制するための、論理学でもあつた。

世界は、現象において、偶然と意志があり、本質において、必然がある。世界には、主体的から客体的へ、道徳と経営と公会発達と認識理ちと生理と物理、といふ分野がある。世界は、意志の三重と、必然の三重。道徳の意志と、経営の意志と、公会発達の意志。認識理の必然と、生理の必然と、物理の必然。主体すなはち体内にもとづき、病的戦争と健康平和がある。健康平和な、現実の認識、にての、保育と教育と保健（の運営と指導）と看護と医療が、理想である。諸民族の伝統には、必然があり、諸民族の自立と協同へ創造する意志が、理想である。個人には、受精と生誕から死亡までの、物理と生理と認識理がある。

〈道徳の本質〉

人間の毎日の生活は、自身の体内を含む、現実の世界について、ただ、学ばせていただく過程である。ほかに、迷ひの無い、無の境地である。四六時中、瞬間瞬間にて、自身の体内の生理を認識し、生理にしたがひつづける。生理にしたがふ、姿勢動作、呼吸、食事と排泄、人間関係とくに異性関係、精神、生活環境。悩み苦しみに、あへてただ感謝し、そこから、悟り楽しみへの必然の道を、求めつづける。必然の世界のうちにて、自身の生理にしたがふ意志。

自身の体内に注意する。快か、不快か。快を求む。体内の無、不快が無いを、求む。これが、健康平和な、といふ認識姿勢。人民のおのが、生活と生産の、個性状況にて、現実冥想（健康平和な、現実の認識の、蓄積）しあふ。と

ともに、現実愛（健康平和な、生活協力）しあふ。現実冥想にて、現実愛しあふ。

生産の目的は、人民おたがひの健康平和な生活を生産しあふことである。

〈経営の本質〉

呪術と宗教と哲学と科学と政治、これらの伝統こそを、止揚し、健康平和な、現実の認識こそを、生産しあふ。現場の渾沌とした情報に、もとづき、秩序ある予想を、しあふ。記録と記憶と注意と発想と会議、これらを連関させる。予想を、実験と運営と経営により、確認しあふ。資産と収支と負債を、反省する。生産前提と労働力を組みあはせ、生産する。生産前提は、労働対象と労働手段である。労働力は、休養手段と、保育と教育と保健と看護と医療により、養成する。仕入と生産と陳列と販促と健康平和研究、これらの最高品質と最低費用を、追求する。商品の魅力と、陳列管理のわかりやすさを、追求する。あらゆる人に期待される、をめざす。提案と通信と金融と運輸と建築を、健康平和化する。資産増殖目的から、未来協同目的へ、再編しあふ。食糧と資源とエネルギーと通貨の需給を、健康平和化する。労働と貨幣の関係、認識と言語の関係を、正しく、理解しあふ。

〈公会発達の本質〉

人間は、世界を認識し、表現ないし言語し記号しあつてゐる。機能言語学より、内容言語学を、発達させる。生活は、労働と生産と休養である。健康平和な、現実の認識、にての、規範と学問と祈りと芸術と養生、つまり、善と眞と信と美と健を、発達させる。公会創造には、学問（思考）と、生産（生体）と、道徳（情感）と、民衆批評（情念）と、政治解消（情念）、といふ分野がある。公会創造は、思索と情念の先導と、批評と反発の自由、である。未来協同へ、規範と、概念を、統一していきあふ。未来協同には、公会と協会と個人とが、ある。家庭と同好会と職場といふ、私的な協会がある。地球公会への道を信仰する。人間社会は、三重の構造。人間社会は、まづ、生産の社会が、ある。労働による生産の社会。その生産の社会のうちに、認識表現の社会が、ある。認識による表現の社会。その認識表現の社会のうちに、規範の社会が、ある。規範による調整の社会。人民の、思考と生体と情感と情念。それが、認識表現（学問協会）、生産（生産協会）、規範（道徳協会ないし政治解消協会）にて、協同する。人民と、地球社会が、調和する。諸民族の闘争から調和（自立と協同）へ、追求しあふ。階級（資産格差）の闘争から、資産循環へ、追求しあふ。労働力（といふ商品）と、通常商品と、貨幣（といふ商品）の、存在と要望を、調整しあふ。人間社会の健康平和化のための、立法と執行と司法と世論ないし選挙、を、考へる。すなはち、政治形態と統治形態と国家形態を、考へる。軍事産業から、健康平和事業へ、追求しあふ。

〈認識理の本質〉

認識には、感覚と表象と概念がある。目的と意志と規範も、ある。規範には、言語規範・記号規範と、道徳と、組織規範と、法律と、条約がある。認識する自分には、生体自分と、脱生体自分とが、ある。認識には、眞理と誤謬がある。眞理には、相対的眞理と、絶対的眞理とがある。概念は、概念と判断と推論へ、展開される。原子ないし素粒子といふ概念と、もののはれ・雪月花・花鳥風月といふ表象と、酵素活性場^はの予感を、調和させていく。

〈生理の本質〉

主体の陰陽と、客体の陰性陽性といふ、生理反応としての世界観が、ある。客体的と主体的の統一として、神経的認識と、血液的労働が、ある。文学の主題として、愛と死がある。生命は、生命体といふ主体における、代謝過程である。遺伝模様は、生存環境に適應する形態において、代謝過程に反映する。生物の生理は、主体(体内の遺伝)の、代謝(同化と異化)による、生存環境への適應である。生命体を構成してゐる物質は、交替してゐる、とともに、生命体の構造・機能は、一定期間、保持されてゐる。さまざまな長さ単位の、動的立体模様の、進化する。着目する。地球表面の動的立体模様の、進化。生物系の動的立体模様の、進化。脊椎動物の、顎^{あご}と歯と骨の、動的立体模様の、進化。人間社会の動的立体模様の、発達。個人の全身の、動的立体模様の、発達。細胞の動的立体模様の、進化。タンパク質分子団の、アミノ酸的な、動的立体模様の、進化。RNA群の動的立体模様の、進化。ソマチッドなどの動的立体模様の、進化。H₂O分子団の動的立体模様の、進化。原子核(とくに酸素原子核)内の、動的立体模様の、進化。物質には、生命促進性といふ物性がある。

〈物理の本質〉

物体運動は、今、ここに、有る、とともに、無い、である。空間の全位置に、場といふ性質があり、空間の位置には、眞空位置と、物質存在位置とが、ある。「遠隔力」より、場の論理を、深める。場は、空間の各位置における、加速度の可能性と現実性、である。力学から電磁気学を、解釈するのでなく、電磁気学の延長から、力学を止揚する。物質には、弾性と塑性と粘性と分離性の総合がある。「エネルギー保存則」といふよりは、物質的運動における、転化比例法則である。

以上は、先述のラッセル以降の「常識」からすれば、超然概念集であらう。が、今の渾沌から秩序へ、次の時代への、準備である。

そもそも、わからないものごとが、ある。さう、甘受させていたたく。これこそが、人間として、精神安定の根本である。最高の悟りである。無理なく、無駄

なく、未知を、既知に、していきあふ。

未来展望

わたくしも、当初はマルクス、エンゲルスに学びつつ、結局、あらゆる共産主義・社会主義・社会民主主義には、無理があると、判断するに至った。でも、むしろよりひろい視野にて、未来展望を創出しました。〈超近代開拓運動〉です。これについては、次をご検討いただけますか。

〈はるかな健康平和への祈り〉

ひとりひとり迷ひの近代から脱出する提案

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/inori_fine.pdf



本文（7枚） <http://www.jomaca.join-us.jp/inori.pdf>



わたくしどもはこれから、『地球公会の理論』を創出しつつ、実際に地球公会を創出してまいります。

各民族は、地球各域の氣候風土や生物系の特殊性に、対応し適応しつつ、生活し生産してきた。それにふさはしく、家族から国家までを組織しつつ、言語や宗教などを発展させてきた。この、氣候風土から宗教までの全体系を、民族生態系と呼ぶことにします。

わたくしどもの〈超近代開拓運動〉は、〈諸民族の自立と協同〉こそを、めざします。そのために、諸民族の伝統を、なるべく、実証的かつ本質的に、ふりかへります。

さうしてさらに、〈諸民族生態系の必然を、相互尊重する社会〉、これを創造するのです。

各民族の自民族からは、絶対的な、各宗教や、各言語的世界観についても、相対化させていただきます。

それらは、人間が地球各域へ、適応し分化した、〈各民族生態系の結果〉としての、各宗教や、各言語的世界観である。さう理解して、相対化させていただきます。

これからの国際平和のために、日本民族の純情さが、その種となりうる。まづ、『どうしたら、日本人風の純情にて、地球を染めうるか?』といふお題にて、なるべく多様な人びとからの意見を、集約したいところである。

一方、日本国は、戦国時代後半と、江戸幕末において、欧米諸国への対抗上、統治を新たに強化せざるをえず、地方の自立発達は、あとまはしであった。また、第二次大戦への軍事闘争のための「一九四〇年体制」が、戦後も、今度は、GDP増大闘争のために継続され、地方の自立発達への道を、今も官僚が見失つてゐる。

日本民族とくに地方民衆の純情さの復興のためにも、地域づくりのあり方を、

転換させたい。

地域づくりは、「住民の陳情により、土木建築などへ、行政が善導する」、以前の高度成長期型の手法が、今では地方の〈こころ〉の再生とはならず、むしろ地方衰退を、助長してゐるやうです。地域の暮しの伝統と現状をみつめ、これからの生産発達や認識表現発達に合せた、産業を創造する。その方向へ、住民の自立を支援し、適正な行政をひき出す、民間事業(NPOなど)が、正解のやうです。わたくしは、山浦晴男『地域再生入門寄りあいワークショップの力』(ちくま新書2019)などに明示された活動に、強く注目してゐます。

数学より前

十七世紀のデカルト以降の近代は、数学(とくに、代数)偏重なのである。数学の対象は、かずと量と図形であり、それは、世界の一部であるにすぎない。数学の狭さを、ヘーゲルと、ヘーゲルに対する〈現実認識化意図〉の諸氏が、問題にした。

人間は、対象(世界の部分ないし全体)を認識し、認識の一部を表現、とくに言語表現してゐる。表現の一部を、ICTにて、記録してゐる。

数学より前に、世界学↓認識学↓言語学とくに日本語学の確立が、必須である。わたくしは、先述の三浦つとむを継承し発達させ、次を公開してゐます。日英機械翻訳の研究者の一部が、三浦つとむの学問の有益さに強く注目し、それら研究者との交流において、思索した成果です。

「現実論の世界学対象と言語」

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_gengo_fine.pdf



本文 (29枚) http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_gengo.pdf



「再編と自立やまとことばの世界観と音韻の論理」

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_yamatokotoba_fine.pdf



本文 (28枚) http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_yamatokotoba.pdf



以上の、数学よりひろい視野からこそ、わたくしは数学について、次を公開してゐます。結果、数学を、西欧宗教から解放し、現場の方法を論理化する、さういふ意味にての、数学の基礎の論となりました。

「現実論としての数学をゼノン↓デカルト↓ガウス↓ヒルベルトにおける限界」

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_suugaku_fine.pdf



本文 (23枚) http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_suugaku.pdf



脱アインシュタイン

残念ながら、地球人は、宇宙において、まだ後進生物であるに、すぎません。

二〇二〇年代に、UFOや異星人のことが、公開される。そんな予感も、いたします。その現実を正視する準備こそ、必須なのです。地球人の無知を知れ！十年近く前、わたくしが中心の講演会にて、『天皇の金塊』（学習研究社2008）が代表作である、情報戦の高橋五郎氏を、ゲストとしてお呼びした。高橋氏は、「ここにある山田さんこそ、UFOや異星人を迎える準備において、一流です。」と、発言された。わたくしへの過分な評価と期待であるが、わたくしが以下の諸論文を公開してゐる事実を、踏へての、ご発言だったと思ふ。

さて、アインシュタインの、相対性理論。これは、二十世紀の、〈物理学風の神話〉として、必然であつた。が、UFOや異星人の現実には、耐へられぬ、〈神話〉なのである。わたくしは、同理論の誤りを、次にて論理的に指摘した。

「物理学再考エンゲルスとマッハを超える」

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_butsuri_fine.pdf



本文（14枚） http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_butsuri.pdf



十九世紀末に、力学と電磁気学を統一する、といふ課題があつた。電磁気学の立場から、力学を、止揚する（内容は保存し、形式は否定する）ことが、正解だつた。正反対に、アインシュタインは、力学の立場から、電磁気学を、封じ込めた。ので、さまざまな、〈場〉fieldについての議論が、不可能となつた。

相対性理論による、思考「統制」がある。高温高圧による、強引な機械的発想でない、原子転換は無い、といふものである。

しかし、超微細な動的立体模様や、精妙な共鳴に、着目する。むしろ、低温低圧にて、自然天然的発想をすると、原子転換が有る、のではないか。

フランスのC.L.ケルヴラン氏が、かう、言ひ出した。

人間生活や、地球の生物系や、無生物系にて、むしろ、常温にて、核融合や核分裂、つまり、原子転換が、多様に、常在するのではないか。

わたくしも、ケルヴラン氏の推理を、総合的に、発達させた。それを記した、次の論文も、ご用意しました。

「新しい自然学への転換原子転換論」

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_tenkan_fine.pdf



本文（14枚） http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_tenkan.pdf



生理的物理

近代学問の盲点として、物理は直接に、生理であり、生理は直接に、認識の理である。物理も、生理も、認識の理も、客体的であるとともに、そのうちにて、物理↓生理↓認識の理と、主体度が増してゐる。客体的であるとともに、主体度が増す。かういふ、〈対立学としての論理学〉が、近代学問の主流には、ない。かずと量と図形を対象とする、数学にとらはれてゐるからでもある。

UFOや異星人を迎える準備。それは、地球人として、どう、健康平和に、生きるか。この課題も、含む。物理学と、生理学と、認識学と、さらに道徳学の、統一も必要である。

わたくしが、この統一を試みた、次の論文も、ご用意しました。

「本質論の誕生へ生物系と個人」

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_seibutsukei_fine.pdf



本文 (10枚) http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_seibutsukei.pdf



①西欧近・現代の、物理学や生理学。これらもまだ、一面的ではないのか。②たとへば、縄文人が、土器や土偶に表明したと考へられる、生理感覚ないし物理感覚など。①と②の区別と連関を、じっくり、じっくり、解明していつてこそ、はじめて、全面的な現実認識の、生理学ないし物理学。これが、将来において、確立するのではないか。かういふ問ひかけを、抑制できぬのが、わたくしが、実父から継いだある技術の、現場なのである。

ある技術とは、TQ技術。(TとQは、あることの記念であり、本質の意味はない。)<氣功の工業化>である。「氣功師が、物質に、氣を込める過程」。それには、認識の理の面と、生理の面と、物理の面がある。父は偶然、この物理の面のみを抽出する、<ある機械>を、発明した。氣功師の、天性も、修業も、必要とせず、氣功師以上のことが、可能。わりと、短時間、低費用。<薬石の人工生産>でもあ

る。これを、今までの物理学や生理学に、調和させるため、父とわたくしは、ふたつの新しい概念を、提唱した。

①<酵素活性場>と呼ぶ、第五の<場>。(相対性理論が、思索を抑圧してゐる、分野)

②<生命促進性>と呼ぶ、まうひとつの物性。

人間や他生物への、看護。そのため、物質の<生命促進性>を、<ある機械>により、加工する。(氣を込める過程に同じ。)その物質を、人間や他生物のゐる空間に、適正に配置し、空間の<酵素活性場>を、調整する。さういふ、看護の技術が、TQ技術。

健康。住居。食物流通。農業。環境。個人から、地球までの、応用。西暦二一〇〇年までの、応用開発が、予想される。西洋と東洋の接点にある、生理的物の、根幹技術である。

わがTQ技術の現場は、未知のことも多い。思索の方向を、整理するため、わたくしは、次の論文も、ご用意しました。

「TQ技術の理解へ物理・生理・道徳」

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_rikai_fine.pdf



本文 (26枚) http://www.jomaca.join-us.jp/jomaca_rikai.pdf



最終目標は、西洋の〈場〉の概念と、東洋の〈陰性陽性〉の表象の、区別と連関の、解明である。

「TQ技術の理解へ」の冒頭は、わたくしが創始する、〈まうひとつの全面的な物理学〉の、ご紹介である。

ところで、UFOは、その機体の物性にこそ、重要な秘密が、あるやうである。わが〈生命促進性〉と呼ぶ、物性の新概念こそ、その方面の研究の、序の口をなすものであらうか。

UFOや異星人を迎へる準備。そのために、転ばぬ先の杖つゑとして、学問を転換させる。〈次の学問〉こそが、必須なのである。

原発安全革命

異星人に、教へてもらつた、などの、未來的な、エネルギー技術などが、すでに、米軍の裏などに、ある。さういふ説も、あります。

そしてそこまでいかなくとも、希望のエネルギー技術が、すでに地球人によつても用意されつつある。

地球上の原発技術は、軍事応用（原発駆動の、潜水艦や航空母艦）を急いだため、はじめから、原則無視の、とても危険な技術なのであつた。

ただし、である！ 戦中にウィグナー氏がシカゴ大学にて提唱した原則に、忠実であれば、むしろ原発は、安全であることが、当然なのです。この地道な原則展開は、はじめ米国にて、続いて日本の古川和男氏により、「トリウム熔融塩核エネルギー協働システム」として、進められた。（古川和男『原発安全革命』文春新書2011参照）今は、各国にて、進められてをり、日本は、株式会社トリウムテックソリューションが、中心である。数年以内に実用化されると、聞く。日本国民と日本国政治も、この事実**に強く強く注目し、多角的に支援すべし**。フクシマを経験した。であるからこそ、戦中のウィグナー原則に、帰るべし！ そしてこれは、〈核廃棄物を百年以内に根本処理できる、唯一の技術〉でもありません！

万民に

山田学といふ、日本民衆のひとりに対し、以上のやう、次の時代への民衆風教育がなされつつ、そして主体的に、研究を進めてまゐりました。横浜市発の、この総合的な流れが、万民にひろがることを、切望いたします。次の異質な時代を生きる、かはい子や孫らのために。

日本風あるいは縄文風るねっさんす。学問（本質論）の世界史の軸に帰れ！ さうでなくては、UFOや異星人を迎へられぬ。

次の時代への異質仲間よ、集つどへ！